
ラブカクテルス その8

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その8

【Nコード】

N8333C

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は少し大人の苦味を利かせたカクテルをご用意しております。
ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は終わりなき日々でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺は腹を押さえた。

もうすぐ日が沈む。

空を見上げるといつもの黒と赤の空が広がっていた。

俺はまだ出血がとまらない腹を、手に一層力を入れて押さえた。

とりあえずどこかで体を休めたかった。

周りは見飽きた瓦礫の廃棄だった。が、そこから少し離れた所に大きな壁と壁の頭が合わさってできた、三角形の空洞があった。

俺は近くに落ちていた、まだ血がついたままのナイフを手にとり、ゆっくりとそこに近づいていった。

俺は足元が悪いその入り口付近まで行くと転びそうになり、音を出してしまった。すると、中からも微かに音が聞こえたのだった。俺

は体を入り口の脇に隠し、中の様子を伺おうと思ったが、幾ら目を凝らしも見えるものは黒い闇だけだった。

しばらく俺は中に入るのを迷って入り口の壁に寄りかかっていた。すると、中から声が聞こえてきたのだった。

声は見えない俺に向かって、呼び掛けた。

誰かそこにいるのはわかっている。俺はもう一人殺したが、そっちはどおだ。もし、こっちを狙っているなら暗闇の中からそっちの様子は丸見えだ。殺ろうたってそっちの勝目はない。痛い目をみたいなら別だが、こっちは来ないほうがいい。と。

俺は少し、警戒しながら持っているナイフを暗闇に突き出した。そして、暗闇に向かって答えた。

こっちも今殺つて来たところだ。だが、そっちが逆に嘘を付いていて俺をはめようとしたとしても駄目だ。こっちにはナイフがある。

切りかかって来ても相打ちだ。

そう大声で暗闇に叫ぶと、中からは、大した自信だな。でもそんなつもりはない。信用しろ。少し話し相手がほしいだけだ。と声が返ってきた。

向こうさんも、声の様子が苦しそうだった。

暗闇の声は続けた。

もし、俺がお前を狙っているならわざわざ声を掛けずに近づいて、入ってきたところを襲っている。

なるほど、確かにそうだった。

俺はまた大声で暗闇に怒鳴った。

わかった。こっちも同じだ。今そっちに行く。そしてゆっくり中へと足を踏み入れて壁伝いに声のする方へと進んで行った。

暗がりに隠れた声の主は頭から血を流していて、どうやら右足も傷ついているようだった。

俺はようやく暗闇に慣れてきた目で、腰を下ろすのに丁度いい岩を見つけ、相手とは少し距離を取って座った。

男は帽子を深々とかぶった俺に、結構派手にやられてるようだなと話し掛けてきた。

おれは静かに大したことはないよと、少し嘘をついた。まだ警戒していたからだった。

男はしかし痛みをまぎらわすには話しをするのが一番だということで、俺も、まったくだと返した。

俺は男にここに来てどれくらいになるか聞いてみた。

男はあまりよく覚えてないが、かなり長い間さつ、と答えた。

そして俺に何人ぐらいそちらさんは殺つてきたんだと聞くので、初めは数えていた気がするがもうわからない、と答えた。

そして俺は男に、自分の名前やいつから、どこから、どうやって、何のためにここに来たのかわかるか、と聞いたがやはり、覚えてはいないそうだ。今まで誰に聞いても同じ答えだった。

少し沈黙が続いたが、それをかき破ったのは男の方だった。

あそこへは行ったか、と。

俺は少し口を僅かにつりあげ、ああ行った。あそこだろ、最低だ。とごもった口調で答えた。

そう、あそこと言えばここにいる連中は知らない奴はいないだろう。あそこは最低だ。出来れば思い出したくもない。

俺もここに来たのはいつからか、俺が誰なのかも知らない。

だが、なぜか俺はここでどう生きて行けばいいか、何をしないといけないかを知っているのだった。

ここには昼間と夜がある。

その日の日の出から、日没までに俺たちは誰かを殺さなければなら

ない。それは本能のように、体が勝手に動くように行われる。どちらか、又は誰かが勝つまでその戦いは終わらない。

なぜ戦うか、決して戦いが好きなんじゃない。

相手も死にもの狂いだ。こっちだってタダじゃ済まない。そして大概はかなりの傷を追う。今日のように。

だが、もし戦いに破れる、もしくは、誰も殺さずに日暮れを迎えれば、ここにいる奴は皆、あそこ行きだった。

あそこはドコにあるか、誰にそこへ連れて行かれるかもわからない。でもその日の結果がそうなら、そこにいたのであった。

あそこに連れてこられた俺には、視覚以外に感覚がなかった。体のどこに命令しても、何も応えない。

しかも目は見開きっぱなしで、瞬きもできない。目に見えるものは一面の白。

それが壁なのか、景色なのか、何なのか調べようもない。

そんな状態でも意識はあるのだ。

叫びたくても口がない。

イライラを当たりたくても手足がない。

精神は耐えきれなくなって発狂する。

しかも目は段々乾いてきて痛み始める。

涙は出ずに乾く一方だ。痛い、辛い、心は不安と孤独に何度となく潰される。自殺したくてもできない。死んだ方がマシだが、殺されてココに来たのだからもう、死んでいるのだろう。

自問自答もきりがなくくりかえされる底なしの地獄。

なぜこんな目に合うのか、思い出せそうに思い出せない。

それはとても長い時間だった。

そしてまた、気付くと、日の出前のこの場所に戻されているのである。

体の傷は治っていてその恐怖から逃げるように、俺たちはまた殺し

合う。

俺がそんな嫌なことを思い出していると、男は言った。なんだい、そんなツラをしているってことは最近またあそこに行ったのか、と。

俺は静かに言った。

ああ。久しぶりに辛かったぜ。

男が相手はどんな奴だったのかと聞くので、俺は少し思い出してみると、珍しく思い出すことができた。

あれはいつかのもう日がかなり傾いていた時のことだ。

俺は焦っていた。あそこに行くのは真つ平だったからだ。そして瓦礫の山の向こうで物音を聞いた。

俺はすかさず、相手を返しり打ちできるように身を隠してタイミングを待つことにした。

そして最高のタイミングで俺は持っていたハンマーで相手に殴りかかるうとしたのだった。

しかし、相手を見ると、子供だったのだ。

俺はそんな事構うものかと腕に力を入れたが、その子供は体を震わせて俺を見た。

俺は、なぜか、いつの間にか、ハンマーをその子供に握らせて俺を殴るように言っていたのだった。そして俺はまんまとあそこ行きになったのだった。

その話を聞いた男は笑い、お前も変わり者だなと目をこちらに向けた。それから続けて言い出した。噂の話を。

男は俺に、噂を知っているかと聞いてきた。

俺は首を傾げた。

噂？

男は少し自慢気に聞きたいかい？と言って話し始めた。そしてその

話しは俺を釘付けにするこになった。

男が言うには、ここには白い羽根が生えた男がいて、奴を見つければココから、別の苦しみのない場所に連れ出してくれ、そしてその男がこの辺に近頃姿を現したとのことだった。

俺は話しを鼻で笑った。そんなことがあるか。大体そんな羽根が背中から生えていたら、誰だってそいつを見つけれられる。

しかし男が言うには、その羽根は日が沈む少し前に開き、そしてその日にまだ誰も殺していないやつがいたなら、そいつを連れて別の世界へ飛び立つのだと言うのだ。

そんなものがココにいるのか？

俺は男がからかい半分で冗談を言っているのかと思ったが、そんなことをしたからってなんの得もないことぐらい、ココにいる奴なら皆知っていた。

そして男は、ゆっくり腰を上げて、さあーて、日が出る少し前だ。

そろそろココから出て羽根がある奴を探すか。ココにいると嫌でもお前さんと殺り合わなくちゃいけなくなる。そんなことになったら、せつかく羽根の奴を見つけても意味がなくなっちゃうからな。そう言っつて足を引きずりながら出て行っつてしまったのだった。

俺はまだズキズキする腹を押さえて男が言っつていたことを考えていた。

もし話しが本当のことならかなりの厳しい賭けになるのは必然だった。だが、このまま変わらぬ生活を続けるのもいいものでは決まらなかった。

人と殺し合うのはもう疲れた。ココから本当に抜け出せるなら、俺にも探してみる価値は十分ある。

俺は日の出により空洞の入り口にさ差してきた光をよけながら今日の昼間はなるべく誰にも見つからないようにしようと身の隠し場所

を探し始めたのだった。

それから俺は何人かの男たちの目をくぐり抜け、なんとか夕暮れ時を迎えた。

俺は慎重に辺りを見回した。幸か不幸か、人の影は近くには感じられなかった。

俺は思った。考えてみればその羽根の男の特徴や、見分け方をあの男から聞き忘れた。俺は後悔した。

このままだと俺は間違いなくあそこに連れて行かれる。

俺はあの光景や、痛みや最低な感情が蘇ってくるにつれて体がこわばるのを感じた。しかし、それを止められることもなく、日は沈み、いよいよ時間はなくなってきた。

俺はとりあえず、誰かを探さなくてはと必死に周りをさまよいはじめた。

そして、とうとう瓦礫の山の向こうに人の気配を感じ、丁度都合よくあったくぼみに身を隠してそれを待つことにした。

その音はだんだん近づき、ようやく俺のいるくぼみのそばまで来た。奴には俺のことが見えていないらしく、無警戒の様子だった。

俺は丁度後ろに回り込む形で持っていたナイフを相手の方に向けた。するとそいつはこちらの気配に気づいたらしく、体にいきなり緊張を走らせてこちらを振り返った。

俺は先を越されるものかと、体重を掛けて相手に飛び掛ろうとした。しかし、体が止まった。

なぜならそれは、昨日の暗闇の中で話をした、あの男だったからだ。

男も体から、緊張をほどき、よおあんたかい。と話しかけてきた。

男の表情はあの時と違って鋭かった。

俺は例の男は見つかったかと聞くと、まだまだ。と言った。そして、

俺に向かつて薄笑いを浮かべ、その様子だとお前さんも探していたのかと聞いてきたので、まあなと返事を返した。

すると男は、残念だが羽根の男は一人しか連れて行かないし、俺はそいつがどこにいるかももう知っていると云ってきた。

俺は少し腰を落として、男の顔をみた。

男は続けて、たぶん俺が羽根の男を捕まえて違う場所に行ったなら、しばらくチャンスは巡って来ないだろう。残念だ。と言うと俺の前から走り出した。

俺は奴に踊らされたと思い、あいつのおかげで俺はあそこ行きになるのだとわかると、奴の後を追ったのだった。

男はしばらく走ると瓦礫につまづき、転んだのだった。俺は男をすぐナイフで刺せるように首元をつかむと、その羽根の男の居場所を聞いたが、なかなか言わなかった。

やがてもう日が落ちるまでには問答をしている暇などないくらい、時間は過ぎていた。

男は俺に殺せるものなら殺してみろ、そうしてお前はここにこのままい続けるんだ。と俺に言うので、俺は男を刺してしまった。

すると男は背中から羽根を出して、すごい勢いで空に飛び上がった。おれは目を丸くして男を見た。

空に浮かんだ男は俺にこう言った。

本当に残念だよ。つい最近、お前がいい行いをしたから、少しチャンスを与えてやったのに。

もう少し待っていれば連れて行ってやれたものを。

そして日の沈み行く彼方へ消えていった。

そして俺はあそこにいたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8333c/>

ラブカクテルス その8

2010年11月5日01時34分発行